

俳句

大津俳句会

水音に艶のでてきし春の川

井芹眞一郎

風花や気ままに降りてくる地表

秋山 恵子

空の青ぐいと引き寄せ辛夷の芽

市原 初女

快気祝ぐ樹令の梅も今盛ん

江藤 みち

猫の恋トタンの屋根を飛びかつて

大塚喜久子

日本晴光る残雪阿蘇五岳

坂本 セキ

雪の朝山また更に高くあり

佐賀 久子

雲切れて冠雪覗く夜峰山

松尾 昭雅

うつし世の大地に目覚め犬ふぐり

渡邊佳代子

初午や押れて拾ふ福の餅

岡崎 浩子

俳句

つのはな句会

寒椿まんかい 祝祭は終った

星永 丈夫

卵焼き焦がし自負心揺らぐ冬

志賀 孝子

にんげんの杜に増殖冬の蟲

田上 公代

そら耳に軍靴ぐんかザクザク星凍つる

木庭 杏子

冬すみれ心配症の母眠る

上杉 波

紋白蝶不穏なうわさ耳打ちす

矢嶋 道子

難解の「俗神」ぞろぞろを読む炬燵かな

水野 春子

ひよこ並んで春を直進す

梅木トキエ

苦手なり酒と男と赤海鼠

塚本 洋子

湯豆腐や母系の余白ゆらゆらす

柴田しのぶ

短歌

大津短歌会

楚々とした白き一輪毒だみの

花を手折りて生花に添える

管野 静

諸々の憶いはるかによみ返る

朝のしじまに残月の見ゆ

吉永 恵子

生きている証に書きし年賀状

歪みし文字が年月刻む

豊岡ミツル

北極より凍てつく寒気南下して

垂れ込める雲視界は不良

鞍 岳志

誰ぞ似る齒ざしりのごとき音たつる

我が靴裏にかみたる石は

渡邊佐代子

豆の木のジャックになりし心地して

艶もつ零余子手籠に摘めり

坂本 杲子

節分に内なる鬼を追い出せと

豆まく幼児に陽射し優しく

小平 善行